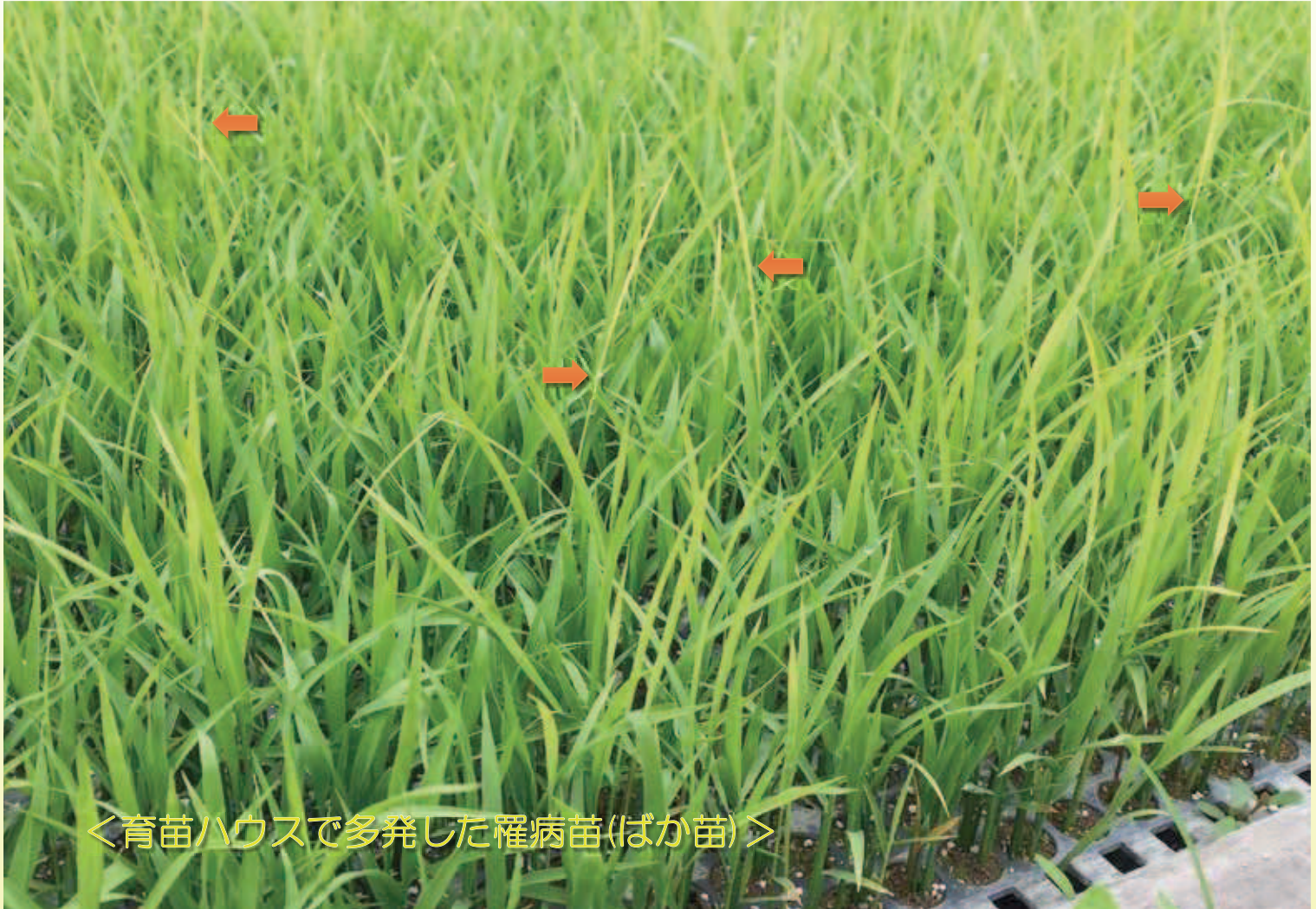


水稲生産農家の皆様へ

～ 優良種子生産に向けてのお願い



「ばか苗病」撲滅を目指した取組にご協力ください

◆道は平成26年度より採種ほ場に隣接す一般ほ場に「ばか苗病」の発病株があった場合、採種ほ場内の株に関して以下の基準を設けました。

- ①一般ほ場の発病株が少ない場合、発病株を起点にして100mの範囲内の株からは採種できない。
- ②一般ほ場の発病株が多く、発病株率が1%以上の場合、採種ほ場に最も近い発病株を起点にして200mの範囲内にある株からは採種できない。

◆採種ほ場周辺の農家の皆様には、育苗ハウス・本田での巡回及び抜き取りに対するご理解とご協力をお願いします。

◆「ばか苗病」の発生が確認された場合は、JA・農業改良普及センターにご相談ください。

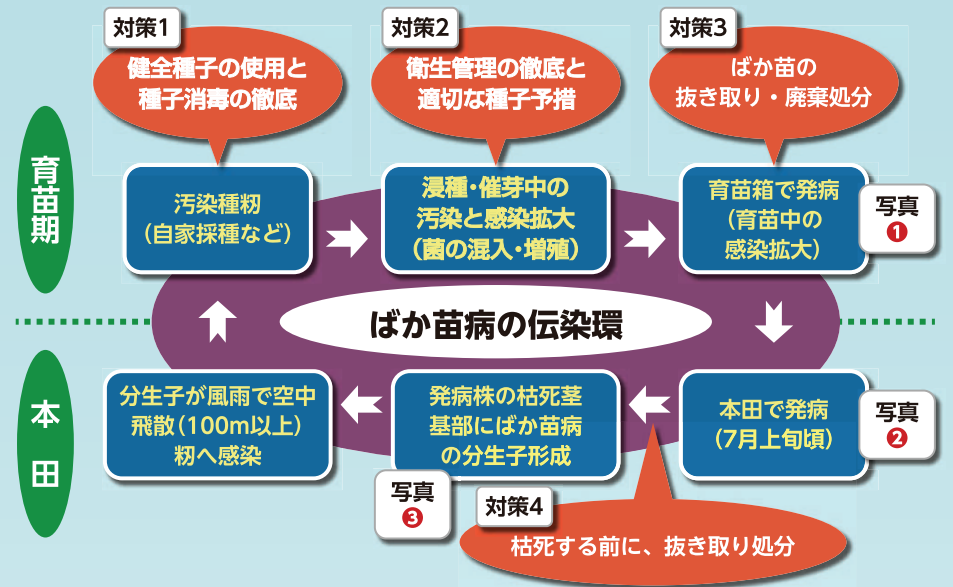
北海道農産協会



2025年3月

ばか苗病の症状と感染サイクル

- ◆ばか苗病は**種子伝染性病**害です。
- ◆病原菌は作業現場の様々な場所に存在しており、消毒済み種子でも作業中に汚染され発病する場合があります。
- ◆移植後に本田で発病する(写真②)と出穂期頃までに枯死して株元に無数の胞子(写真③)をつけます。
- ◆胞子は数百メートル飛散するとされ、出穂・開花期以降、胞子が籾に付着または侵入すると、汚染種籾として翌年の発生源となります(右図参照)。



的確な種子消毒と取り扱い方法、ばか苗病発生時の対処法

【対策1】種子消毒のポイント

※ばか苗病は的確な種子消毒(化学農薬等)、種子予措期間中の環境改善で抑えられます。
 ※自家採種は保菌リスクが高いため、100%採種ほ産種子を使用します。

- ①化学農薬は効果が確実で安定している。
- ②生物農薬は薬液温度を厳守
- ③温湯消毒は処理温度・時間等を厳守(温湯消毒種子はすぐに冷やし、乾燥または浸種する)。
- ④各種子消毒法を組合せて防除効果を高める(右表)。

◆**ベンレートによる種子消毒は、ばか苗病に効果がありません。**

表 種子消毒法による防除効果の違い
 (平成22年北海道普及推進事項から抜粋)

種子消毒法		防除効果 (ばか苗病)
単独処理 (対照区)	エコ (エコホブ 浸種前200倍浸漬)	C~D
	エコDJ(エコホブDJ 浸種前200倍浸漬)	D
	食酢 (食酢50倍)	D
	温湯 (温湯消毒60℃10分)	B~C
	タフ (タフブロック 200倍)	D
組合せ 処理	エコ + 食酢	B~C
	エコDJ + 食酢	B~C
	温湯 + 食酢	B~C
	温湯 + タフ	B~C

(防除効果) B: 化学農薬と比べほぼ同等、C: やや劣る、D: 劣る

【対策2】再汚染の防止～種子消毒後の取り扱い方法

- ①消毒方法が異なる種子や未消毒種子と一緒に浸種しない。
- ②消毒前の種子と消毒後の種子は同じパレットやシート等に置かない。

【対策3】育苗中にばか苗病を見つけた時には

- ①ポット苗は株ごと、マット苗は周辺の土ごと(できればマット苗単位で)抜き取り、廃棄する。

【対策4】本田でばか苗病を見つけた時には

- ①本田の罹病株: 枯死前に株ごと根付きのまま抜き取る。抜き取り作業は出穂前に完了する。

※対策3・4とも、抜き取った苗や株は、土に埋める等、適切に処理する。また疑わしい徒長苗や徒長株も同様に処理する。

病原菌は作業現場の様々な場所に存在する！

平成30～令和2年の3カ年の調査では以下の場所で病原菌が確認された。

作業工程	搬入後の種子保管時	浸種時	催芽時	催芽後の種子保管時	播種時	苗箱定置時
菌の検出場所	トラック荷台、 水槽、床	水槽、作業空間	水槽、催芽器、 脱水機、棚、 シート、糠、 作業空間	バット、シート、 麻袋、粃すり機、 精米機、床、糠、 昇降機	播種機、播種板、 育苗箱、成苗ポツ ト、粃すり機、粃、 糠、昇降機、ハウ ス資材、作業空間	粃殻、糠、 ハウス土壌、 ハウス資材、 灌水ホース

ばか苗病菌汚染防止チェックシート

ばか苗病菌はどこにでもいることを認識し、チェックシートを活用して衛生管理を徹底し、適切な種子予措に努める。

作業工程	✓	汚染防止のための注意点と対策
作業工程全般に関する基本的事項		温湯消毒後の種子は汚染されやすい状態なので、特に注意が必要である。
		脱穀・精米用設備等は使用後の清掃を丁寧に行う。これらに種子や使用する機材が接触しないよう留意する。浸種～播種作業も離れた場所で行う。
		作業場所の清掃を徹底し、稲わら、粃殻、粃、糠、粉じん等が残らないようにする。
搬入後の種子保管		搬入トラックの荷台はあらかじめ洗浄する。
		種子保管用の水槽やバット等はあらかじめ洗浄して清潔な状態を保つ。種子は作業場の床に直置きしない。
		消毒済み種子は清潔を保ち、過湿にならないように保管する。
浸種時		水槽は事前にブラシを使って丁寧に手洗いし、0.0125%の次亜塩素酸塩液等で消毒する。
		循環式催芽器で水循環する場合、水槽以外に使用する機材も事前に丁寧に洗浄する。
		浸種はこまめ(2～3日ごと)に水交換を行う。水温は15℃以上にはせず、10～12℃の適正管理を励行する。
		蒸気式催芽では、褐条病対策としての浸種後半の食酢50倍液による2日間処理を実施する。
		浸種中は水槽の上をビニル等で覆い、粉じん等の混入を防ぐ。
催芽時		水槽は事前にブラシを使って丁寧に手洗いし、0.0125%の次亜塩素酸塩液等で消毒する。
		催芽機や脱水機等も事前に丁寧に洗浄する。
		温度は30℃未満にはせず、30～32℃の適正管理を励行する。
		循環式催芽では、褐条病対策としての食酢50倍液処理を実施する。
		催芽中は水槽の上をビニル等で覆い、粉じん等の混入を防ぐ。
催芽後の種子保管		種子を広げるバットやシート等はあらかじめ洗浄して清潔な状態を保つ。種子は作業場の床に直置きしない。
		催芽後の種子は清潔を保ち、過湿にならないように保管する。
播種時		育苗箱等は前年使用後に土や根が残らないように丁寧に洗浄し、使用するまでは粉じん等がかからないよう片付けておく。中性次亜塩素酸カルシウムの1000倍液等で消毒するのが望ましい。
		播種機や播種板は事前によく清掃しておく。

個々の作業に過度に神経質になるのではなく、環境対策も含め作業工程全体としてきれいにしていこう意識することが重要である。